

シドニー五輪とロンドン五輪の新聞報道のジェンダー分析

A gender analysis of newspaper coverage of the Sydney and London Olympic Games

1K10C192-3 左官 佑樹

主査 リー・トンプソン 先生

副査 石井昌幸 先生

【目的】

ゼミの講義で、スポーツ分野におけるジェンダーの不平等があると学んだ。ジェンダーの不平等と言っても、女性のスポーツへの参画機会の少なさやメディアによる男女の功績を称える表現の違いなど様々な不平等があることを知った。その中で、スポーツ分野におけるメディアによる男女報道の不平等について興味を持った。「今日ではメディアを介せずスポーツを見聞する人は皆無と言えるのであって、たとえ競技場に足を運びスポーツ観戦をした人であっても、スポーツニュースを見たり、翌日の新聞を読むであろうし、スポーツのメディア表象は依然男女の差異を自然なものとして描き続けているからである。」[飯田,2002b:77]と述べられており、現在のスポーツ報道においてもその傾向は見られるのかを調査しようと考えた。

スポーツ分野におけるメディアによる男女報道の不平等を調べるために、媒体を新聞にし、量的・質的調査を行うことを決めた。

【方法】

シドニーオリンピックとロンドンオリンピックの比較研究のため、飯田貴子の先行研究と同様の調査方法で行う。

・調査期間

ロンドンオリンピックが開催されている期間(2012年7月27日～2012年8月12日)

・調査対象

朝日新聞、読売新聞の一面およびスポーツ面に記載されているオリンピック関連記事

・調査項目

- 1、全記事数における男女の割合(朝日新聞、読売新聞統合)
- 2、競技種目別全記事数の割合上位10(朝日新聞、読売新聞統合)
- 3、記事数に占める記者の男女割合(朝日新聞、読売新聞統合)
- 4、見出し(名前や愛称、男性支配を表す表現、女性を表現する言葉、女性役割について述べられている言葉)

【結果】

「全記事数における男女の割合」は、男性の割合が増

え(両性について扱っていた記事が減少し)、女性記事の割合は変わらなかったことがわかった。

「競技種目別全記事数の割合上位10」は、ロンドンオリンピックでは、男性記事の割合にジェンダー・イデオロギーは見られず、好成績を残した競技や種目が豊富な競技、階級がある競技の記事が多かった。

一方、女性記事の割合を見ると、好成績を残した競技や種目が豊富な競技、階級がある競技の記事が多いものの、「ホッケー」、「体操」、「シンクロ」といった「優雅さ、バランス、美しさという伝統的な女性らしさのイメージに合致するスポーツ」[コークリー/ドネリー,2011:214]とされている競技の記事割合も高かった。

「記事数に占める記者の男女割合」の変化は全くなく、男性記者によって書かれた記事が約95%を占めた。これには、スポーツ部に在籍する女性ジャーナリストの不在が大きな要因であると考えられる。

「見出し」についてだが、ロンドンオリンピックの見出しにも、愛称や名前、家族の支えを必要とする女性像が描かれ、「～ちゃん」、「娘」、「両親のおかげ」といった表現が見られた。また、競技中は女性本来の役割を果たしていないと競技者自身が感じているというような見出しを付けるメディアの巧妙さが伺えた。

【考察】

スポーツメディア組織自体がジェンダー化された組織である以上、女性の記事数の割合(シドニーオリンピックとロンドンオリンピックでの女性競技者のメダル獲得数は異なっていたが割合は同じであった)や、女性記者の割合(男性記者の男の眼差しによって、今後も記事は書かれ続ける)は増えていかないであろう。また見出しにも、女性の功績を矮小化する言葉や表現が使われ続けると考えられる。

先行研究で「スポーツメディアは女性と男性の差をより一層浮き彫りにし、『男と女は本質的に異なるのだ』というメッセージを流布している」といっても過言ではあるまい。[飯田,2002a:74]と述べられている通り、メディアは「ジェンダー・イデオロギー」の形成に助長していると考えられる。